吉備国際大学研究紀要
（人文・社会科学系）
第28号，77－88，2018

不登校児との関わりが持てなくなった保護者に対する行動コンサルテーション

―共通の遊びによる行動活性化的介入が功を奏した事例―

土居　正人

Behavioral consultation for a mother with a school-refusing child
Success case of behavioral activation intervention through common play

Masahito DOI

Abstract

Objectives : The significance and problems of behavioral consultation were examined in the present case.

Setting : We conducted interviews in the counseling room of D elementary school in C city.

Participants : The consultant was a school counselor, client 1 was a male elementary school student with problems in case 1, client 2 was a female elementary school student with school refusal in case 2, and the consultee was his or her mother.

Intervention : We intervened with common play for the inability to have any relationship with the child. For the school refusal problem, we conducted an intervention through functional analysis.

Measure : The primary outcome measure was the percentage of attendance at school.

Result : Common play in behavioral consultation improves the relationship with clients. Furthermore, it is thought to have a facilitatory effect on interventions.

Key words：Behavioral consultation, School counseling, School refusal, Common play
キーワード：行動コンサルテーション，スクールカウンセリング，不登校，共通の遊び

吉備国際大学心理学部心理学科
〒716-8508　岡山県高梁市伊賀町８
School of Psychology, Kibi International University.
8, Iga-machi, Takahashi, Okayama, Japan（716-8508）

問題と目的

これまでに，土居（2016; 2017），土居・園田（2016）は，行動コンサルテーションを行い，その効果や問題点について検討してきた。例えば，土居・園田（2016）は，問題が生じている児童の行動に影響する環境のみの機能分析を行うだけでなく，児童自身の技能にも焦点を当てることで，同じ強化子を用いたとしても結果が異なることについて述べている。そして，土居（2016）において，行動コンサルテーションでは，効果を検討するために行動記録を付けることが必要であるが，実際の学校臨床では人員不足などのコスト的側面から，記録の実施自体が困難であることが示され，そのような場合，出席日数などの行動の所産をカウントする方が適切であることを主張している。そして，土居（2017）では，コンサルタント（スクールカウンセラー，以後SC）が問題を抱えたクライアント（児童）に対して機能分析的アセスメントや介入計画を立てたとしても，それを実施するコンサルティ（保護者）自身に問題があると介入厳密性に支障をきたし，正確な介入が行われないことがあるという事例を紹介し，その場合はコンサルティに対して機能分析と介入を行う必要があると述べている。このように行動コンサルテーションは，機能分析や介入が的確であると素早く，かつ効果の高い結果を得られるが，遂行されるまでに，様々な問題があることを指摘している。特に，コンサルティが行動理論を理解し，介入するまでの最初の段階で躓くことが多く，そして，それを行動レパートリーとして習得した後では，スムーズに介入されていくようである。

それは本稿の事例においても同様であった。この事例では，学校場面での躓きが多くなり不登校に至った女児が，家に引きこもり，家族との関わりを持てなくなっていった。そのため，機能分析による介入計画が決まったとしても，そもそもコンサルティ（保護者）とクライアント（子供）のコミュニケーションが断絶しており，関わることができない。このような時，行動コンサルテーションでは，どのように介入すれば良いのだろうか。例えば，土居（2017）では，コンサルティ（保護者）とクライアント（不登校児）が共通の遊びを通じて，親子関係に情緒的交流が生まれ，その後の介入が素早く改善された。本事例においても共通の遊びを行ったことで，子供の大人からの関わりを拒否する行動が改善された。

この事例では母親は１人目の問題を抱えた子供（事例１）に介入し，行動理論を理解した後，新たに問題を抱えた２人目の子供（事例２）に対して，行動理論による介入を実施しようとしたところ，子供と関わること自体ができず，躓いていた。そのような状況の中，親と子の共通の遊びによる介入が功を奏した。そのため，この事例を報告し，なぜ親と子の共通の遊びが介入計画の遂行を促進したのかについて検討を行い，行動コンサルテーションの問題点や意義について考察することを目的とした。

なお，本稿の事例のメインは事例２の母親からB子に対する関わり行動と不登校問題の解消である。事例１はコンサルティ（母親）が行動理論を理解し，活用できるまでの過程を示すために記述している。

方法

現代の行動理論では，「認知」「感情」「行動」を行動として扱っている（Jonathan, Andrew, & Laura, 2009）。「認知」は「考える」，「感情」は「感じる」，「行動」は「外的に行動する」とし，本稿では臨床的に何が有用かという観点から，柔軟な定義を採用している。従って，「公園へ行く」「達成感を得る」「責任を持つ」「自信を持つ」なども行動的に考えるものとする。

相談者と対象児：相談者は母親であった。本事例の場合，コンサルタントはSC（著者）であり，コ

ンサルティは母親，クライアントは事例１では兄のA君，事例２では妹のB子である。

既往歴：A君はADHDとアスペルガー障害の診断を受けており，多動を落ち着かせるための薬を飲んでいる。B子の既往歴はなかった。

家族構成：母親，A君（小学６年生），B子（初回面接時は小学２年生，終了時は３年生），祖父，祖母，叔父（母親の弟）の６人で構成されている。家は二世帯住宅で，母親が仕事で家にいない時，子供達は祖父母の部屋で過ごしている。祖父はとても厳格な性格であり，二人の子供に関わってくれているが，厳しく叱ってばかりいる。祖母は物静かな優しい性格傾向で，二人の子供の世話をしてくれている。叔父は自身が中学生の頃から不登校で今も家に引きこもっており，仕事をしていない。

A君の特徴：口数は少ない方で落ち着きはなく，大人しく静かにすることが苦手である。学校では授業中座って話を聞くことができる。ルールを覚えたり時間を守ったりすることができない。家の中ではうろうろと歩き，道具を拾っては別のところに置こうとする。時に祖父の仕事道具を勝手に持っていき，祖父から叱られることが何度もあった。叱られてもA君が行動を変えることはなく，すぐに次の問題行動を起こしていた。

B子の特徴：まじめで大人しい性格である。こだわりが強く，何事も完璧にしないといけないと思っている。家では，物静かで家族の指示を素直に守ることができる。家族からは「良い子」として扱われており，B子もそれに満足している。A君は家族に迷惑ばかりかけており，A君よりも自分の方がよくできる子だという気持ちがある一方で，母親からの関わりは少なく，母親に甘えたいという気持ちがある。

期間：両事例共に，母親に対して月に１～２回，１時間の面接をそれぞれ約１年間(計２年間)行った。

場面：C市にあるD小学校の相談室で面接を行った。

手続き：B子の出席日数を測定対象とした。土居(2016; 2017)，土居・園田（2016）と同様に，遅刻や早退した日を含めない完全登校のみを測定した。そして，登校日数の比率「週ごとの完全登校率＝週の出席日数／週の開校日数×100」を従属変数とした。独立変数は，機能分析による介入計画をコンサルタント(SC)からコンサルティ(保護者)に伝えて，実施してきてもらうことである。達成目標は，完全登校率100%である。また，介入厳密性を保つため，SCは介入計画を文章化し，プリントしたものを台本とよび，それをコンサルティに渡して，家で実践してきてもらった。これによりコンサルタントの介入を独立変数と見なした（加藤・大石，2004)。

ベースライン：介入が実施されるまでの５週間とした。

倫理的配慮：事例報告に関しては，保護者や学校より許可を得た。人物が特定されないように，事例の記述では個人を特定しうる内容について変更を加えている。

事例１：非行行動が現れ始めている児童を持つ母親への行動コンサルテーション

相談までの経緯：最近，A君の問題行動が増えてきた。A君の心の距離は家族から離れ始めており，このままでは家族がバラバラになっていきそうだと感じたため，スクールカウンセリングを受けることにした。

介入までの面接内容：A君は，小学校低学年までは素直に母親の指示に従っていた。しかし最近，母親の話や指示を聞こうとする姿勢は見られるが，それを実際の行動に移してくれることが無くなった。例えば，宿題をしてから遊びに行くようにと伝えているが，実際には宿題をせずに遊びに行ってしまう。母親は仕事をしており，帰宅が９時から11時頃になり，見守ることができないことからA君は守ろうと

しないのではないか。また，困ったことがあったら相談してほしいと伝えるのだが，A君は前よりも無言でいることが多くなり，関係が悪くなってきていると感じる。特にA君から祖父母への態度は悪く，言うことを聞かなかったり反抗したりするなど，祖父母から関わりづらくなっている。

ある日，A君はゲームが欲しいと言い出した。A君の友達は皆ゲームを持っており，遊びについていけないからだと話す。しかし，祖父母はそれを反対した。その後，A君は公園で夜遅くまで高校生と遊ぶようになった。非行に走る可能性が考えられ，心配している。母親の相談内容の希望としては，子供への関わり方を知りたいということであった。そこで，SCは行動コンサルテーションを行った。

【①問題同定段階】：クライアント（A君）の問題として，母親と祖父の指示を守ろうとしないこと，宿題をしないこと，門限を破り高校生と遊ぶことであった。そして，コンサルティ（母親）の問題として，祖父母がA君の面倒を見ており，母親がまったく関わってなかった。よって標的行動はA君の（ⅰ）母親と祖父の指示を守る行動の増加，（ⅱ）宿題をする行動の増加，（ⅲ）門限を守る行動の増加であり，母親は（ⅳ）母親から子供に関わる行動の増加であった。

【②問題分析段階】：それぞれの標的行動に対して，機能分析を行った。まずはA君の（ⅰ）母親と祖父の指示を守る行動について，A（先行条件）：A君は指示内容を理解することはできるが，母親と祖父はA君に「○○してはいけない。」と禁止しかしていなかった。そのため，A君はなぜそれをしなければならないのか，それをすることによってA君にとってどのような意味を持つのか，何か良いことにつながるのかについての説明がなかった。B（行動）：A君は低学年の頃は指示を守れていたことから，行動レパートリーは形成されていた。そこから，多動や不注意によって，指示が守られていないわけではないと考えられた。C（結果）：その指示を守ったところで自分のしたいこと（遊びなど）ができなくなることから，その行動の強化価は低く，実行されにくいと考えられた（好子消失の弱化）。次に（ⅱ）宿題をする行動について，A（先行条件）：これまで宿題の問題を解くことはできていたことから，知識が足りていないわけではないことが分かる。さらにA君は宿題をすることに意味や目的を感じていないようであった。B（行動）：これまでは宿題をしてきていたことから，行動レパートリーは形成されていた。C（結果）：宿題をしないと祖父から注意を受けることになり，それはA君にとって嫌子である。しかし，何度も祖父から叱られているため，強化の飽和化が起こり，嫌子の強化価が低くなっていると考えられた。また，宿題をすることや指示を守ることによって，A君には何の好子（付加的，内在的のどちらにおいても）も得られないことが行動の自発頻度を低めていると考えられた。（ⅲ）門限を守る行動について，A（先行条件）：小学校の友達は皆ゲームを持っており，A君を仲間に入れてくれようとはせず，一人で家にいても楽しいことがないという状況であった。そこでB（行動）：公園へ行く。するとC（結果）：公園で高校生が遊んでくれた。A君にとって，高校生と遊ぶことは楽しいため，公園へ行く行動が増え，帰る時間が遅くなっていた（好子出現の強化）。その結果，門限を守る行動が減弱化していた。次に，（ⅳ）母親から子供に関わる行動について，A（先行条件）：母親は仕事が忙しくて子供に関わる時間がないことや，祖父母がA君の面倒を見てくれるため，母親が関わらなくても，今日まで過ごせてきたという状況があった。さらに，子供への関わり方の知識を持っていなかった。そのため，B（行動）：適応的な親から子への関わり方の行動レパートリーを獲得していなかった。C（結果）：母親自身が子供に関わって達成感を得た経験が乏しく，関わることに対する強化子が少なかったと考えられた。次に随伴性マネジメント（強化子の

選定）として，A君はゲームが欲しいと言っていたことから，ゲームを与え，それをすることはA君にとって強化価の高い好子になると考えられた。

以上のことから，介入方法として，SCは母親に次のことを伝えた。まず，（ⅰ）母親と祖父の指示を守る行動について，母親や祖父の要求や指示の難易度がA君にとって高すぎること，その割には強化子である祖父からの叱責（嫌子）による強化価が低まってきていることから，指示を守る行動が減っているのだと考えられた。そこで，母親や祖父からの課題や要求の難易度を下げ，何をしても良いのか，そして何をしてはいけないのかを明確にし，してほしいことは具体的に示すこと，なぜそうしないといけないのかについての理由を述べることをA君に伝えた。（ⅱ）宿題をする行動と（ⅲ）門限を守る行動について，どちらも行動レパートリーを得ている上で，それを遂行していないことから，強化子に問題があることが考えられた。そこで，大人側から課題を出し，それらが達成できていたらA君の欲しい好子が与えられるというルールを作り，A君と話し合い，それを紙に書いて同意を得るようにと伝えた（行動契約法）。そして，（ⅳ）母親から子供に関わる行動について，母親がA君に腹を立てた時にはすぐには叱らずに（計画的無視），その後良くないと思った行動については母親からA君に「次は○○してみよう」と，次の課題として渡すように伝えた。そして，その課題ができていたら褒めることとした（分化強化）。そして，これらの介入計画が書かれた台本を渡して説明し，母親に介入を実施してもらった。この介入過程中で効果が現れれば，母親自身の達成感や責任を持つことに対する自信につながり，母親から子供へ関わる行動が増加すると考えられた。

【③介入の実施】介入直後の面接内容：SCからの介入計画を受けて，ゲームは家族でルールを決めてから買うことにした。祖父からの課題として，A君から１日１回祖父に質問をしてほしいとのことであった。A君から祖父に質問をしてくれると，様々な問題に対して理由を説明することができ，かつコミュニケーションが取れるのではないかと話す。その後，母親はA君を呼び，祖父母の前で説明した。約束事として，①門限を守ること，②その日の宿題をすること，③祖父に１日１回は質問をすること，④時間がきたらゲーム機を指定された場所に返すこととした。これらができていれば，ゲームをしてもよいとし，反対にできなかった場合は，ゲームを没収すると伝えた。これについてA君は承諾したため，ゲームを買うことにした。

そして，母親はA君にゲームを買い与えた。しかしその初日は，指定された時間にゲームを返すことができなかった。すると，祖父や母と言い争うことになった。その言い争っている間に，祖母がゲームをスッと持っていくことで，取り上げることに成功した。その後，A君はゲームを返すことができなかったことについて謝り，次の日から約束を守るようになった。また，今まで母親はなぜA君を叱っているのかについての理由を説明してこなかったが，今回の介入として，丁寧に説明をしてみた結果，A君は素直に指示を守るようになった。指示を守っていれば，自分の要求が通ることを理解したからだと母親は話す。宿題をしないとゲームができないことから，A君は宿題をするようになり，さらに生活リズムまで整うようになった。また，１日１回，A君は祖父に質問をしているため，祖父もA君も楽しそうに会話をするようになっている。A君は笑顔が多くなり，家族と関わろうとする行動が増え，次のゲームを買ってほしいなど母親への要求も出てくるようになった。そして，大きな問題は無くなったことから，面接を終結することにした。

事例２：不登校児との関わりが持てなくなった保護者に対する行動コンサルテーション

相談までの経緯：母親とA君は話し合いによって，

物事を進めるようになってきており，A君の問題は落ち着いてきていた。すると，今度は妹のB子が学校を欠席し始めた。そこで，SCはクライアントをB子に切り替えて，面接を継続することを提案し，母親はそれに同意した。

介入までの面接内容：少し前からB子は宿題をしなくなった。そこで，母親が横について一緒に宿題をするようにした。算数を解いている時に，B子は少しでも間違うと消しゴムで何度も消してしまい，完璧にできなければ次に進めることができなかった。また，B子の交友関係について，近所の友達はB子が１年生の頃は仲が良かったが，２年生になると遊んではくれなくなり，現在友達がいないという。そのようなことから，B子は学校に行く意味が分からないと言い始め，登校への抵抗を示すようになった。以前までB子は，A君よりもできる自分に満足しているようだった。今はできないことが増えてきて，劣等感を感じているようだと言う。そこで一度B子を休ませることにした。するとそれ以降休むようになってしまったので，今度はB子を無理やり連れていくことにした。学校へ行く前にB子は「キー，キー」と金切り声をあげて抵抗を示したが，何とか連れていくことはできた。しかし，その後B子は保健室で過ごし，しばらくすると早退してしまった。何度学校に連れていっても同じ結果であった。最近ではB子に宿題や学校のことについて話しかけると無視されるようになり，母親からの関わりが持てなくなった。このような現状から，SCは行動コンサルテーションを行った。

【①問題同定段階】：B子の問題として，母親からの声かけや指示を無視すること，宿題ができないこと，友達と遊ぶことができないこと，思ったことを友達に伝えることができないこと，自発的登校がないこと，そして母親の問題として，B子とどのように関わればよいか分からないことであった。このようなことから，標的行動はB子の場合，（ⅰ）母親の指示を守る行動の増加，（ⅱ）宿題に取り組む行動の増加，（ⅲ）友達に対する適応的なコミュニケーション行動の増加（具体的には，友達に声をかける行動，思ったことを伝える行動），（ⅳ）自発的登校行動の増加，そして母親については，（ⅴ）母親からB子へ関わる行動の増加であった。

【②問題分析段階】：B子の標的行動に対して機能分析を行った。（ⅰ）母親の指示を守る行動について，A（先行条件）：これまで，B子は自身の力で何でもできると思っていたが，最近になってできないことが増えてきた。B（行動）：もともとB子は母親の指示を守る行動技能を持っていた。C（結果）：母親からの関わりは好子であるが，それ以上に母親の指示に従ったとしても思うような結果が現れなかったことから，話や指示を聞こうとしなくなっていると考えられた（好子消失の弱化）。（ⅱ）宿題に取り組む行動について，A（先行条件）：休みや早退が増え，授業の遅れが出てきていることから分からない問題が増えてきており，B子の知識は足りていないと考えられた。また，B子は自分と同じ学年の問題ができなければならないと考えており，少しでも間違えば失敗だと捉えていた。B（行動）：反復練習が足りないことから，学習が定着していないと考えられた。C（結果）：そのようなことから，少しでも間違うことは恥ずかしいと思い，宿題をすること自体を回避していると考えられた（嫌子出現の弱化）。（ⅲ）友達に対する適応的なコミュニケーション行動について，A（先行条件）：A子には仲良くなれそうな友達はいるが，声をかけたり相手に思いを伝えたりするための知識が足りなかった。B（行動）：これまでにこのような練習をしたことがなかったため，行動レパートリーが形成されていなかった。C（結果）：それらの行動を実行するとどのようなことが起こるのかについてイメージできないことから，行動が自発されないと考えられた。（ⅳ）自発的登校行動について，A（先行条件）：B子は友達がおらず，

宿題の問題を解くことができない上に，A君は楽しそうに友達と遊んでおり，さらにA君は学校に行っていて，自分は行けていない状況であった。B（行動）：登校の行動レパートリーは持っている。C（結果）：これまでB子は何でも自分一人でできると思っていたが，ここにきて何をしてもうまくいかない状況が続き，学習性無力感のような状態に陥っていた。次に母親の標的行動について，A（先行条件）：これまでの介入によって母親は祖父母と連携が取れるようになれ，子供との関わり方については理解していたが，B子はA君と性格や態度が異なるため，対応方法が分からなかった。そこから，知識不足が想定された。B（行動）：知識があればすぐに対応できる技能を持っていた。C（結果）：現在の母親は，これまでのように祖父母に任せるのではなく，A君の事例を通して，自身の力で子供に関わることができ，そこから子供に関わることへの好子が得られていた。よって，ここに問題はないと考えられた。次に随伴性マネジメントとして，A君が母親と関わろうとすることが多かったことから，母親からB子への関わりは少なかった。そこで，母親との遊びを好子とすることにした。

次に，介入は２つの段階に分けた。まず介入１期は，母親がB子と関わりを持てるようにする段階。次に介入２期は，学校場面における標的行動への介入の段階とした。まず介入１期の（ｉ）指示を守る行動について，母親からの指示が入らないことから，初めは日常の自然な流れの中で指示や課題を出すことが重要だと伝え，B子と母親の共通の遊びを探すことを提案した。

共通の遊びを探すことの理由として，初め母親は，B子だけが楽しいと思う遊びに付き合うが，それのみを続けると母親の方が楽しいと感じられないため，好子の強化価は低く，母親からの遊び行動が維持されない。そこで，次第に母親も楽しいと感じられるような遊びを見つけていき，最終的に両者とも楽しいと思える遊びを探してく。それが見つかると両者の遊び行動は維持され，B子にとって母親自身が好子化され（派生の原理），その後の母親からの指示や課題が通りやすくなると考えられたからであった。

そして，初期段階では早急に宿題行動に介入するのではなく，もっと日常的な，例えばお手伝いのような課題を母親からB子に出し，実施してもらい，大人の指示や課題を実行する習慣を作るよう提案した。

次に介入２期として，（ⅱ）宿題遂行行動について，学校の教科書やドリルは学年や段階的レベルが明確であり，次々と続くような形式であると，B子は先のページを見てしまい，他のクラスメイトに比べて自分がそのレベルに達していないことを過大視し，落ち込んでしまう。そのため，宿題行動が遂行されにくくなっていると考えられた。そこでSCは，母親に教科書やドリルと同じ問題を紙に書き写すことを提案した。このようにすれば，B子は解いている問題の学年が分からなくなり，かつその問題だけを解けばよいことから，遂行されやすくなると考えられた。また，B子は「何のために学校に行くのか分からない」と言っており，型にはまった勉強は，B子の思考をより固くさせてしまうことから，なるべく日常の流れの中からも問題を出してみる方が良いと伝えた。そして，（ⅲ）友達への適応的なコミュニケーション行動について，遊びの誘い方などの声のかけ方，思ったことの伝え方を口頭で教え（教示），実際に母親がやって見せ（モデリング），B子にさせる（ロールプレイ）。そして，母親がそれを褒め，ご褒美として母親がB子と遊ぶこと（強化）を伝えた。初めはこのような付加的好子が必要であるが，やがて友達と遊べるようになったり，自ら主体的に行動することで物事が進んだりすることへの内在的好子が得られれば，付加的好子は必要でなくなると考えられた。（ⅳ）自発的登校行動について，以上の標的行動が達成されれば，学校場面においてB子

にとって可能なことが増えてくるため，自然と登校行動は増加すると考えられた。そのため，この標的行動への直接的介入は必要でないと考えられた。次に母親の標的行動である（vii）母親からB子への関わり行動について，A君の事例を通して母親は，子供との関わり方の行動レパートリーを習得しているため，母親として子供に主体的に関わることが母親にとっての好子であると考えられた。よって，以上のような方法だけを伝えることにした。

結果

【③介入の実施】介入１直後の面接内容：欠席する日々が続いていた。そこで，母親は仕事を２週間休み，B子と一緒に遊ぶことにした。まずはトランプやオセロをしたり，刺繍をしたりした。そして，二人で遊園地へ遊びに行った。すると両者ともトランプと刺繍がとても楽しくなった。毎日それを楽しんでいると，徐々に母親からの指示を守るようになってきた。そこで,急に宿題から入るのではなく,別の簡単な課題から取り組むようにするため，母親はB子に花壇の花の水やりと手入れをさせることにした。それらができていたら表に丸を付け,その後,トランプや刺繍をするようにした。毎日そのような関わりをしているうちに，B子は学校に行くようになったが，依然早退は多かった。

介入２直後の面接内容：B子は学校にひとまず行けるようになってきたので，介入２期の段階に入ることにした。母親はB子に友達に対する声のかけ方，頼み方，断り方のスキル訓練を行った。そして次の日，B子は休み時間に友達に話しかけた。すると友達と話が合い，仲良くなれ，休みの日に遊ぶ約束をしてきた。そして遊びの日当日，B子は寝坊をして，その待ち合わせ時間に間に合わないことが分かった。時間にも厳しいB子は一つのことがうまくいかなかったら全て駄目だと思ってしまう傾向があり，遊びに行こうとしなかった。そこで母親は，誰にでも失敗はあること，遅れた場合は相手に連絡をすればよいことをB子に伝えた。すると，B子は友達に連絡をすることができ，友達は快く許してくれた。そして，その日は楽しく遊ぶことができたという。この出来事以降，日常でのB子の状態が安定してきていたことから，母親は宿題行動に介入した。B子は学校の宿題であるプリントやドリルはしないため，母親が同じ問題を１枚物の紙に書き写して，どこから出た問題なのかを分からないようにすると，解くことができた。しかし，B子にとって分からない問題が出てきた時，母親の教える時間が少しでも長引くと，そこで諦めてしまっており，宿題行動への介入が難航していた。そのような日々が続いていたある日，B子が友達とお祭りに行く時のことであった。祖父がB子に1,000円をあげると言った。祖父はB子に1,000円を渡す前に，「300円のくじを３回買ったら，何円おつりが返ってくるか」という問題を出した。しかし，B子はそれを解くことができなかった。祖父はB子に「それが解けなかったら，だまされてお金が返ってこないかもしれないぞ」と言った。そこで近くにいた母親はB子を呼び寄せてこう言った。例えば10円持っていたとして，３円のくじを３回引いたらいくらになるかと聞いた。するとB子は答えることができ，1,000円をもらうことができた。そしてお祭りに行くと，実際に同じ状況が起き，300円のくじや食べ物を３回買って100円のおつりをもらうことができた。B子はその出来事をとてもうれしそうに話していた。その体験以降，母親が教えようとするとB子からは素直に聞こうとする姿勢が見られ，計算問題を解くようになった。そして，休むことも早退も無くなった。

フォローアップ：その後，B子は学校に行きたくないとは言わなくなった。どうして学校に行けているのかと聞くと，「友達と遊べるから」と言い，楽しそうに過ごしている。宿題は毎日しており，テス

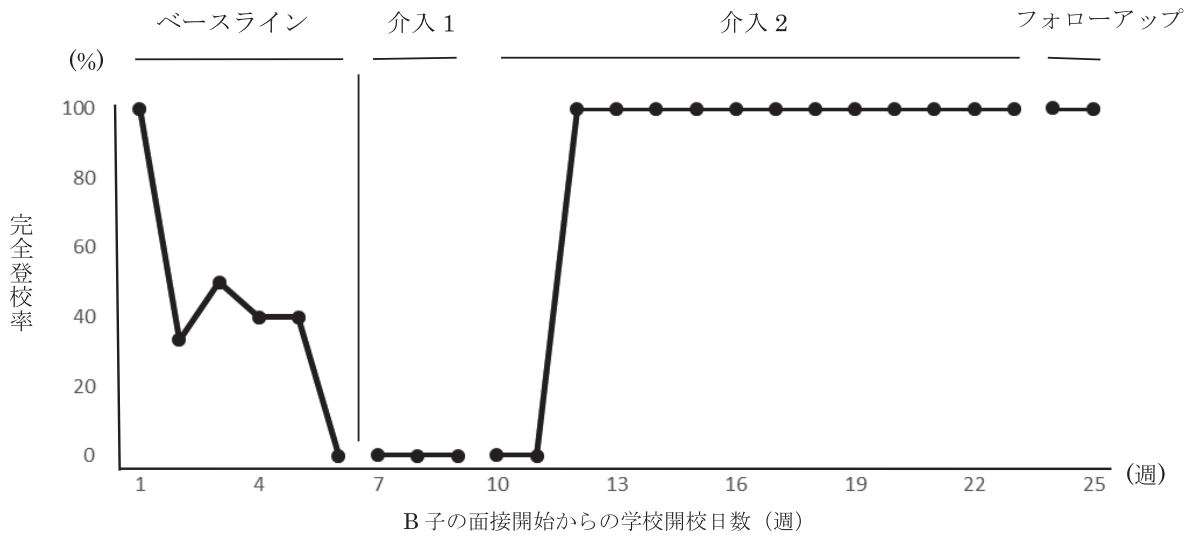

図１　B子の完全登校率

トでは平均点を取っている。学校にはスムーズに行けており，家族間にも交流が生まれ，次に問題があったとしても母親は家族と連携し，子供達とは話し合いながら解決できるようになったことから面接を終了した。

次に，行動コンサルテーションの介入結果を図１に示した。グラフの横軸はB子の面接開始からの学校開校日数（週），縦軸は完全登校率を示している。図１のベースラインにおいて休みや早退が増え始め，最後の完全登校率は０％になっていた。そこで，介入１において，母親は２週間休みを取って一緒に遊んだが，指示を守る行動のみの介入であったため，完全登校率には影響を及ぼさなかった。そして，介入２の友達へのコミュニケーション行動と宿題行動に介入してからは，完全登校率は一気に100%に到達している。このことから介入２が完全登校率に大きく影響していると考えられる。

【④問題評価段階】：SCと母親で，行動理論による介入について評価を行った。まず，行動コンサルテーションの目的や方法について，行動の原理は分かりやすかったという。介入厳密性について母親は，することが台本に書かれているため，家で何度も読み，概ね実行することができたと述べている。そして，課題として子供がすることを決め，それをチェックし，できていたら好子を与えることは，母親が仕事で夜遅くなったとしてもできることから実施しやすかったという。介入の結果や効果について母親は，すぐに結果が現れたことから，母親から子供へのコミュニケーションに問題があったことに気づかされたという。以上のことから，行動コンサルテーションによる社会的妥当性が確認された。

そして，母親は次のようなことを述べた。B子に対して，一緒にトランプや刺繍をしたり，二人っきりで遊園地に行ったりすることで，B子は笑顔が多くなり，母親からの話を聞いてくれるようになった。そこから，これまで母親からの関わりがとても少なかったことが良く分かった。二人の子供は祖父母ではなく，母親に全力でぶつかってきてほしいと感じており，それが問題行動に現れていたのではないかと言う。母親自身が幼い頃から祖父を恐れており，自分の人生を自分で決めてこなかった。そのため，子供達を祖父母に任せ，母親としての役割に責任を持ってこなかった。今回，子供達二人共に問題が発生し，子供達の心が家族から離れようとしていることに気づき，それをどうすることもできない自分に気が付いた。そして，それらの問題に介入していくことで，

親として子供とどう関わっていけばよいか分かった。このまま祖父母に任せっきりの人生ではいけないと自分自身の人生を見つめなおすきっかけとなった。今では子供のことについて，できる限り自分（母親）でやれることはして，時には祖父母の協力を得て子供に関わっていくことにしていると言う。

考察

まず，本稿の事例について，述べたい。母親と叔父は幼い頃から，祖父を恐れて育ってきた。祖父は厳格な性格で，母親達はその言い分を守って育ってきた。そのためか，母親と叔父には主体性が無く，母親は子供の世話を祖父母に任せるようになり，子供との関わりを持とうとしなかった。そして，叔父は中学生の頃から不登校になり，現在も家に引きこもっている。このように家族関係に不全があったことから，今回の２事例の問題が出現したと考えられる。兄のA君は何をしても祖父に叱られ，ゲームがしたいという自分の要求が通らなかったことから，問題行動が増え始めた。さらに，祖父による叱りの強化価が飽和化によって低まり，A君は指示や課題に従わなくなっていた。そこで行動契約法を用いて，A君がしたいこと（ゲームをすること）ができる代わりに，大人側の課題（ゲームを指定時間に返すことなど）をしてもらうことにした。A君はそれに同意し，初めは約束事を守ることができなかったが，母親は祖父母との連携が取れたことで，その介入に成功した。そして，決められた課題をしていれば，自分の要求が通るといった適応的なコミュニケーションに変わっていったことから，家族からA君は認められるようになった。そうしているうちに，今度はB子に問題が現れ始めた。これまでB子は家族の言うことをよく聞いていたことから，「良い子」だと褒められてきた。そのため，B子は自分で何でもできると思っていた。そして，家族の指示に従わないA君を見て，優越感に浸っていた。しかし，A君と家族との関係が改善された頃，B子は学校において様々な問題に直面していた。B子は友達がおらず，学校の課題や宿題に躓き，学校に行けなくなっていた。さらにA君は母親の介入によって，素直になり，適応的な行動が増え，家族から褒められることが増えてきた。それを目の当たりにしたB子はA君より劣っていると感じていた。B子はその感情を受け入れることができず，一人で家に閉じこもるようになり，家族からの声かけに応答しなくなった。そこで，SCは機能分析を行った。B子はこれまで問題なく過ごせていたことから，母親はB子と話し合ったり教えたりすることはなかった。そのため，様々な知識が足りていなかった。母親はB子に介入しようとした時には，すでに関係が悪化しており，関わることができなかった。そこで，介入では一緒に遊ぶことから始めた。それにより，課題を出して好子を得るという親子のコミュニケーションを獲得することに成功した。そして，宿題行動や友達に対するコミュニケーション行動に介入し，B子は学校を休むことや早退をすることが無くなった。

次に，なぜ母親が二人の子供と関わってこなかったのかについて考察する。行動理論では強化履歴という考え方がある。Jonathan, Andrew, & Laura.（2009）によると，「強化履歴」とは，ある行動を形成してきた過去の随伴性の総和であり，それによって将来なぜその行動が起きる可能性が高いかが説明できるとしている。そして，カウンセラーがクライアント（コンサルティも含め）自身の環境を変えるようにエンパワーメントすることで，新たな履歴が作られ，その履歴が時間をかけて新たな機能的な行動を生み出すことができるのだという。すなわち，母親は過去に祖父の指示に従ってきたことから主体性が無く，物事を自分の力で解決しようとする姿勢が強化されてこなかったと考えられる。そして，本事例においては，SCが母親を行動論的介入によっ

てエンパワーメントすることで母親の新たな強化履歴が作られていったと考えられる。

そして，本稿の２事例において，注目したい点がある。それはクライアントと関わりが取れない時に共通の遊びが功を奏したことである。土居（2017）の事例では，コンサルティ（母親）がクライアント（子供）に対して期待水準を高く見積もっていたことから褒めることができなかった。その時に母親は子供と共通の遊びをするという介入を行った。すると，両者に情緒的交流が生まれ，母親の子供に対する姿勢や期待水準が変わり，素直に褒めることができるようになった。B子の事例においても初めは母親が話しかけても返事はなかったが，共通の遊びを実施していくことで，会話が生まれたのである。時には指示や課題を出し，それをB子が達成するという過程を経ることで，本来の問題（不登校）への介入である宿題行動や友達へのコミュニケーション行動への介入につながっていったと考えられる。また，事例１のA君に関しても，祖父がA君と関わりを持つことができなかった。そこで，祖父は１日１回A君から質問が欲しいと課題を出し，それが実行されるごとにA君との関係が良好になっていった。これは遊びではないが，共に同じことをし，楽しい時を過ごすことが悪化していた関係を変化させていったと考えられる。そこから，現代の問題が見えてくる。すなわち，大人と子供の間で同じ物事を共有し，楽しむ時間が失われてきているのではないだろうか。いつしか共に喜び，共に悲しむ体験など価値観や感情を共有する場面を失い，それが関係の希薄につながり，現在のコミュニケーションをより困難なものにさせているのかもしれない。それにより，問題が起こりやすい場面では，大人は子供にただ指示を与えるだけになっており，一方的なコミュニケーションになっているのである。そのような時は，双方の交流を含めた介入をしていくことが重要であり，それには共通の遊びが有効であると考えられる。時に遊びの中で大人が「そのカード取って」といった小さな指示や課題を出すことがあり，それに対して子供は「ありがとう」と好子を返す。そして，その反対もある。ここに相互交流が生まれ，これが介入課題の達成へとつながっていったと考えられる。このように行動コンサルテーションでは，対人相互作用場面において，複数の関係者が互いに好子を提示しあい，それを獲得できるシステムを構築するという「相互強化」を重視しており（加藤・大石, 2011），本事例では，特に共通の遊びが相互強化を促進したと考えられる。また，島宗（2000）によると，好子や嫌子が現れると，その時，そこにいた人やそこにあった物，状況などが好子化したり，嫌子化したりするという（派生の原理）。遊びや会話を通すことで，その活動が楽しいものであるほど，その人自身が好子化し，その人が出す課題が受け入れられやすくなると考えられ，このことから，母親の指示が通りやすくなったのではないだろうか。

また，遊びが行動を活性化したとも考えられる。伊東・松見（2008）によると，行動活性化とは，活動性の上昇，つまり楽しめる活動や目標志向的な行動への従事頻度を増加させることによって，正の強化（以後，好子出現の強化）を得られる機会を増加させ，抑うつの改善を試みる行動的アプローチであるとしている。この事例の場合，B子はできないことが増え，うつ状態に陥っていたと推測される。Jonathan, et al.（2009）によると，人は好子の安定した供給源が失われるとうつが生じるという。その際に，行動活性化理論による治療では好子による強化によって行動を復活させ，好子の安定した供給源との接触を維持するのに必要なスキルを教えることであるとしている。また，行動活性化とスキルには関連があるとされる。スキルのなさから体験の回避が起こり，抑うつ状態を維持しており，スキルを高めることによって，行動が活性化され，抑うつを減少させることができるといわれている（Jonathan, et al.,

2009; 小幡・村椿・健名・富家・坂野，2010)。本事例においてもスキル訓練を行っており，共通の遊びによる行動活性化やあるいはスキル訓練を行うことによって，好子が得られる機会が増加し，うつ状態が改善されたとも解釈できる。以上のことから，行動コンサルテーションにおいて，共通の遊びをすることは，関わりが取れなくなったクライアントとの関係を改善し，そして自然なコミュニケーションを取り，介入課題をスムーズに実施しやすくする効果があると考えられる。さらにスキル訓練を加えることで活性化した行動が維持されやすくなることが示唆された。

結論

本稿の目的は，実際の事例を通して，行動コンサルテーションの問題と意義について検討することである。例えば，機能分析による介入計画が決まったとしても，そもそもコンサルティ（母親）とクライアント（子供）のコミュニケーションが断絶し関わることができない場合，どのようにすれば良いのだろうか。本稿の事例の場合，母親と子供の共通の遊び探し，それを実施することで，母親は子供と関わるようになった。そして，遊びの中で，自然なコミュニケーションを取り戻すことができ，それが介入実施の達成へとつながっていった。行動コンサルテーションにおいて，共通の遊びをすることは，関わりが取れなくなったクライアントとの関係を改善し，そして自然なコミュニケーションが取れ，介入課題をスムーズに実施しやすくする効果があることが示唆された。

文献

1）土居正人（2016）．行動コンサルテーションにおける行動記録が困難な事例 ――出席日数を従属変数とした介入―― 国際教育研究所紀要，**26**，45-55.

2）土居正人（2017）．不登校児を持つ保護者への行動コンサルテーション ――コンサルティへの介入が必要であった事例―― 吉備国際大学心理・発達総合研究センター紀要，**3**，37-44.

3）土居正人・園田順一（2016）．不登校児をもつ母親への行動コンサルテーション　吉備国際大学研究紀要，**26**，135-143.

4）伊東直・松見淳子（2008）．行動活性化モデルに基づく大学生の抑うつ傾向と快活動の関係の検討　人文論究，**58**（２），43-48.

5）Jonathan, W. K., Andrew. M. B., & Laura, C. R.（2009）. Behavioral Activation. Routledge, a member of the Taylor & Francis Group.（大野裕（監修）・岡本泰昌（監訳）・西川（訳）（2015）．認知行動療法の新しい潮流　２　行動活性化　明石書店）.

6）加藤哲文・大石幸二（2004）．特別支援教育を支える行動コンサルテーション　連携を協働を実現するためのシステムと技法　学苑社.

7）加藤哲文・大石幸二（2011）．学校支援に活かす行動コンサルテーション実践ハンドブック　特別支援教育を踏まえた生徒指導・教育相談への展開　学苑社.

8）小幡昌志・村椿智彦・健名宏樹・富家直明・坂野雄二（2010）．高校生における行動活性化と抑うつ，ソーシャルスキルの関係　日本教育心理学会総会発表論文集，**52**，355.

9）島宗理（2000）．パフォーマンス・マネジメント ――問題解決のための行動分析学―― 米田出版.